

がんセルフヘルプ・グループのつながりと場 —物語と対話に基づく支え合いの文化—

The Interface between A Cancer Self-Help Group and Space —A Culture of Narrative Community—

古関 光浩 (Mitsuhiro Koseki) 指導：辻内 琢也

序 章

がんによる死は日本国民の死因の約3分の1を占め、現在も増加傾向にある。それに伴い、適切なインフォームド・コンセントに基づく医療を推進しようとする社会運動や、治療実績の向上、情報開示など医療を取り巻く社会状況の変化に伴って生じてきた。がん患者のセルフヘルプ・グループもまたこの流れの中に位置づけられる。

第1章 先行研究と本研究の位置づけ

先行研究を検討すると、病院外における患者の健康希求行動に着目したものは少ない。これは、一般的な社会的通念として、治療に限定した機能を担う病院と、そこからはみ出すものを扱うセルフヘルプ・グループという機能分担が想定されているからと考えられた。そこで本研究では、院外で誕生したがんセルフヘルプ・グループ「今を生きる」(仮名)と、彼／彼女らが集う場「あずき養生の家」(仮名)に注目し、どのようなプロセスで集まり、グループ活動はどのように営まれているのかを記述し、解釈することを通して、物語と対話に基づく文化の可能性を示すことを目的とした。

第2章 がんセルフヘルプ・グループの つながりと場とは

筆者は「今を生きる」の活動に参加し、参与観察と聞き取り調査を行った。そして、得られたデータを基に「通過儀礼の3過程」(分離期、移行期、再統合期)を参考にしつつ分析を行った。まず「分離期」では「日常のリセット」が行われ、続いて「あずき養生の家」に行く決め準備を始める。次に「移行期」では、「今を生きる」は、「あずき養生の家」において非日常の状態に置かれる。「あずき養生の家」は日常よりも鋭敏化された感覚で、自己の経験を解釈できる場所でもある。移行期の終盤で、「今を生きる」はグループ活動の締めくくりとしてシェアリングを行い、感情、情報や方法、考え方についての「分かち合い」と「ときはなち」を行っていた。「再統合期」では、今まで支配していた考え方から新しい考え方を生み出す「ときはなち」を基に、日常に戻る準備が行われていた。

この時期では「皆でまたこの場で会いましょう」という言葉が交わされ再会を約束していた。この言葉が「今を生きる」の活動を再生産させる物語の接着剤となり、関係存在(皆で)、時間存在(また)、自律存在(会う)存在(村田久之、2003)となって、自己を支えている様子が伺えた。

第3章 本研究の批判的検証と発展的可能性

本章では、はじめに、病いの語りを聞く上で留意すべき点を考察した。次に、筆者なり的人类学的研究姿勢の在り方について反省的に考察した。今後の展望については以下の2点が挙げられた。一つは、今後増えていくだろう単身世帯のがん患者がどう生きていくことができるのかという点である。もう一つは、筆者が名付けた「ナラティブ・コミュニティ」の有用性である。この概念は、「ナラティブ・コミュニティ」の機能的側面と、儀礼概念である「コミュニティ」を組み合わせた造語である。「ナラティブ・コミュニティ」的空間においてなされる対話は、日常よりも鋭敏化された感覚で、自己の経験を解釈できるだろうと筆者は考えている。そして、「皆でまたこの場で会いましょう」という言葉が、「ナラティブ・コミュニティ」を継続的なプロセスに結び付ける接着剤の役割を担っている。

終 章

がんセルフヘルプ・グループの研究は、彼／彼女らが問題を劇的に克服するというより、日々の活動のなかで新しく生じる問題を、継続的に解決するプロセスを見ようとするのが重要である、と筆者は考えている。「皆でまたこの場で会いましょう」という言葉が、がんと共に生きる人の中で、非日常のつながりと場の有難みを内在化していく。そして、彼／彼女らにとって、「生きる目標」となり、再び集まることで、物語と対話に基づく支え合いの文化が継続されていくだろう。